

『グローバル天理』第11号（通巻23号）掲載論文要旨

井上昭夫 巻頭言 「現代の「谷底」・「高山」戦争に学ぶ」

アフガニスタンへの空爆は、「高山」と「谷底」の戦いを象徴するかのよう進行している。民間人の犠牲を伴うこの空爆は、さらなるテロの恐怖をかき立てている。あらゆる方法でテロを防がなければならないが、なぜテロが起きるのかを社会的視点からでなく、人間の心の本質に触れて考える必要もある。「世界は鏡」と教えられる限り、信仰的行為に繋げていかねばならない。

荒川善廣 「「元の理」の探究（8）—混沌からの創造 [5]」

過程哲学 (process philosophy) はあらゆる事物を生成発展 (becoming and progress) という動的な過程 (dynamic process) としてとらえる。そこでは神と世界の歴史とが緊密な関係をもつ過程として理解される。だが、そこに弁証法の論理 (logic of dialectic) が介入すると、歴史を含む全体が必然性の体系 (a system of necessity) となってしまう。つまり、弁証法的な過程哲学 (the dialectic process philosophy) では、神は必ず世界を創造しなければならず、世界史は神の計画の遂行とみなされるのである。神による自由な世界創造と、個々の事実の自由な生成を説明するには、弁証法は不向きである。歴史の発端となる原始事実 (a primordial fact) は偶然的存在 (an accident) であり、単に「在る」 (is) とだけ言えて、「必然的に在る」 (necessarily is) とは言えないものである。

北詰洋一 「紛争回避のテクノロジー（8）—テロの連鎖反応を断ち切る最善策」

アフガンをめぐる過激派撲滅の武力作戦は、米国の予想通り (?) かなり長期化しそうである。長期化すれば、アラブ・イスラム諸国の米国離れの危険が大きい。ブレア英首相は、その点を配慮してアフガン問題の根っこにあるパレスチナ問題の解決に積極的に乗り出したようだ。問題解決は容易ではないが、もしメドが立てば、各地の紛争で刺激的な行動にでている過激派の暗躍の大半を押さえ込み、久しぶりで伝統ある英外交の復活が注目されるだろう。

末延岑生 「ことばと教育（8）—ことばの元を探る [8]」

ヘルダーは、神をたえず土台に備えた上で、できうる限りの客観性、科学性を加味しつつ、自説を打ち出したものと思われる。その結果、ことばを全面的に神授だといえなかったヘルダーの苦しみ。ヘルダーが神授説に反論をとらえたということは、奇しくも、また皮肉なことに、結局のところ、自分の信ずる神の不十分さを証明することになってしまった。まさに彼はこのとき、ことばの起源において自分の信ずる神さえをも越え、より完璧な神によることばの神授説を目指したのではないか。ヘルダーにとって、この親神こそ理想の神といえるのではないかと私には思えるのである。視点を変えれば、ヘルダーは天の理を教祖が説く百年も前に、こうした完全な理想の親神の到来を渴望していたかも知れないということであり、もしそうなら、これも驚嘆に値することである。

結論として、ことばの元が宿しこまれ、人間の自由な心を元に創り上げられたことばを省みるとき、人間の心のみならずことばをも支配するような神からは、ことばが神から授かったものとする「神授説」を導き出すことは、非常に無理があるといえる。その点、天理の教えの根本であり、「仕込み説」の元である「元の理」は、ヘルダー自身の、あらまほしき神に対する期待、予言を、あらゆる点で満たしているからである。こうした親神の元からことばが誕生したというのであれば、ヘルダーだけでなく、人はその親神からのことばの神授説を受け入れることができるのではないだろうか、というのが私の大胆な仮説である。

金子 昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望—（17） 教学編 天理経営学とは〔2〕 慎みの経営」

新刊書の供給過剰のために、出版界は自縄自縛の事態に陥っている。業界全体としての課題として、経営倫理の確立が望まれる。本稿では、水谷教授の「経営価値4原理システム」を紹介しながら、平成大不況の時代に必要な慎みの経営について論じる。

堀内みどり 「天理異文化伝道（22）天理教のコンゴ伝道〔21〕—2代会長時代〈1967—1971〉〔2〕」

布教認可を得ているとはいえ、国情が不安定なコンゴでは常に教会が戦闘に巻き込まれる恐れがあった。いざという時のために、親神様・教祖に移っていただく場所を確保したいと清水は思った。再赴任となった中村も2代真柱から「株分けを考えよ」といわれ、1年間の任期中に布教所を開設したいと願った。その思いが通じたのか、現地信者との二人三脚のにおいがけに歩く中で、布教拠点が見つかり、1968年7月1日ポト

ポト布教所が開設される。翌月 30 日には政変が勃発、大統領が交代、翌年末、労働党の単独政権となる。

小滝 透 「天理比較神秘論への試み（23）仏教と教祖〔4〕—救済論」

宗教と救済論はもとより密接なつながりを持っているが、文化的社会的状況によりおそろしく変化する。日本で言えば、同じ仏教を奉じてインド仏教と日本仏教の間には天地も違う見解が多々存在する。今回はその背景につき、天理教の立場を 間にはさみながら考えてみた次第である。

塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信（19）医学研究の行方〔3〕」

命を絶つのも医療なのか。人間の遺伝子そのものに手を加える医療方法の開発、人間の将来を変えてしまうのではないか。既に命の活動をはじめている胚細胞の将来を止めてしまい、他の命を救うために使う医療の開発これでいいのだろうか。命の始まりを確り見極めねばならない時ではないか。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（23）からだで学ぶ」

幼児と母親との、あるいは周囲の人々との繋がりは、まずもってそれぞれのからだ共鳴しあうことによって生まれてくる。その場にわたしたちは、共に響きあう柔軟なで繊細な身体を思い描いてみることができるだろう。『子どもは言葉をからだで覚える』という実に興味深い本がある。その本によれば、言語音を生み出には、息を切って声を発すること、さらにはその前段階として、リズムを刻むことができないと。それを赤ちゃんは、笑うことを通して練習しているらしい。周囲が友好的に働きかければ働きかけるほど、赤ちゃんはたくさん笑うだろう。それがまさに、言語技術の第一歩となる。

特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る（10）」

飯田照明 二代真柱様とスポーツ〔2〕

中山正善二代真柱様は、自ら柔道やラグビー、テニス、水泳、スキーなど多くのスポーツを楽しまれた。スポーツは肉体のみならず精神の鍛錬にとってもすぐれた手段であるところから、教信徒にもスポーツを勧めた。それは、天理教の究極目的は現世における陽気ぐらしであり、それには健康と長寿が重要な要素となるからだ。また、二代真

柱様は各種スポーツ団体の代表や役員を務められ、スポーツの振興に大きく寄与された。特に柔道の国際化に多大な貢献をした。